

# 守る。育てる。三重の『宝』

私たちが日々の暮らしを営む三重県には、美しい海・山・川があり、人々が適度に利用することで共存してきました。そこには多種多様な生き物たちが生息していますが、中には近年、絶滅の危機に瀕しているものもあります。一方、長い時間をかけて大切に育ってきた植物の中には、貴重な品種だと確認されるものもあります。

今回は、希少な自然や動植物を、地域の宝物として大切に守り、育て、さらには魅力づくりに役立てている人々をご紹介します。温かく迎えてくれた人々もまた、三重の『宝』でした。

\*各グループが開催するイベント・祭りなどの開催日時・場所は、変更になる場合がありますので、必ず事前にご確認ください。



取材・文…中村真由美  
撮影…梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

多様な生物が生息する水辺づくり

# 水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座

【亀山市一帯】



外来魚駆除作業の途中、大きなフナを見つけて大喜びの参加者

早速行動を開始します。市内を流れる中ノ川および鈴鹿川流域の各集落に住む高齢者宅を訪ね、昭和15(1940)年ごろに目にした魚類・甲殻類・爬虫類などの呼び名を聞き取り調査したのです。

地道で緻密な調査は、平成16(2004)年に「中ノ川における魚の昔の呼び名」として、さらに2年後には「鈴鹿川における魚の昔の呼び名」として、結実しました。冊子を見せてもらうと、「三重県レッドデータブック2015」で絶滅危惧I-A類(ごく近い将来において絶滅の危険性が極めて高い種)に分類されているネコギギ(ナマズ目ギギ科)やカワバタモロコ(コイ目コイ科)の記述がありました。これらは、数十年前までは、身近な生き物だったのです。魚の昔の呼び名は、現代の私たちに大切なことを教えてくれているのです。

地域によって魚の呼び名が異なることに気付いたのは、「水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座」の栗原勉さん、桜井好基さん、服部耕作さん。魚好きといふ呼称があるのに驚きます。

メダカに限らず、同じ亀山市内でも、

「コバエ・コバヨ・コビンチョ・チンチンコーバイ・メンパ・メバヨ…」。

右に記した単語は、すべてメダカの呼び名です。同じメダカでも、多彩な呼び名があるのに驚きます。

り、ぬかるむ足元に悪戦苦闘しながら行うのです。こうして膨大な時間と労力をかけて外来魚駆除をした池は、これまでに30か所を超えるといいます。

同会の地道で息の長い活動は、平成28(2016)年には「生物多様性アクション大賞」で入賞するなど、高い評価を得ています。また、70代を中心の「亀山の自然環境を愛する会」(浅田正雄代表)や、30代を中心の「魚と子どものネットワーク」(新玉拓也代表)と連携した活動が評価され、本年3月には同2団体とともに、日本自然保護協会による

「日本自然保護大賞2019」教育普及部門の大賞を受賞しました。

なお、本年3月3日に実施された、市内の池での池干しも、「魚と子どものネットワーク」とともに実施。子どもたちも含めて全員が胴長に身を包んで作業しました。皆さんの想いは、次世代へ着実に受け継がれていくことでしょう。

## お問い合わせ

「水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座」  
TEL 090-4795-8541  
(栗原勉さん)

「中ノ川における魚の昔の呼び名」(右奥)と「鈴鹿川における魚の昔の呼び名」(左手前)



カワバタモロコ\*



外来魚駆除作業

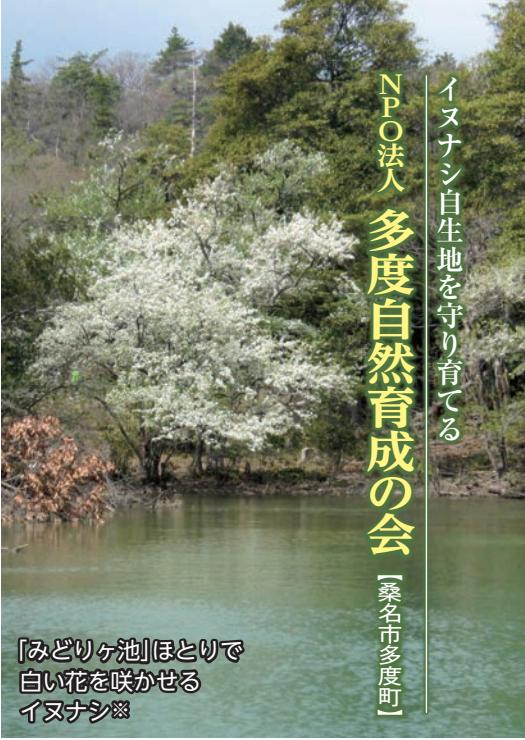


池干し作業に参加した皆さん

## NPO法人 多度自然育成の会

[桑名市多度町]

られています。



「みどりヶ池」ほとりで  
白い花を咲かせる  
イヌナシ※

春には新緑、夏には川の流れをせき止めた天然プール、秋には紅葉と、季節ごとに賑わう多度峡のすぐ近くには、とても希少な植物の自生地があります。平成16(2004)年に三重県指定希少野生動植物種指定、同22(2010)年には国の天然記念物に指定された、イスナシ(標準和名マメナシ)です。バラ科の落葉性の小高木で、国内では三重県・愛知県・岐阜県にのみ分布することから、NPO法人「多度自然育成の会」が中心となり、定期的な保全活動などが続け

しているのは、44株。数メートル以上に成長した木を間近に見ると、細くてしなやかな枝が無数に伸び、葉も蕾もとても小さなことに驚きます。

大橋さんによれば、白く可憐な花が咲くのは4月上旬ごろで、秋には直径8ミリメートル程度の実が生るとのこと。ただし、実は渋くて、動物たちも食べないとのことでした。

また、落ちた実から発芽した場所を示す目印が立ててありますが、よく見ると、成長できずに消えたものが多く

ありました。しか

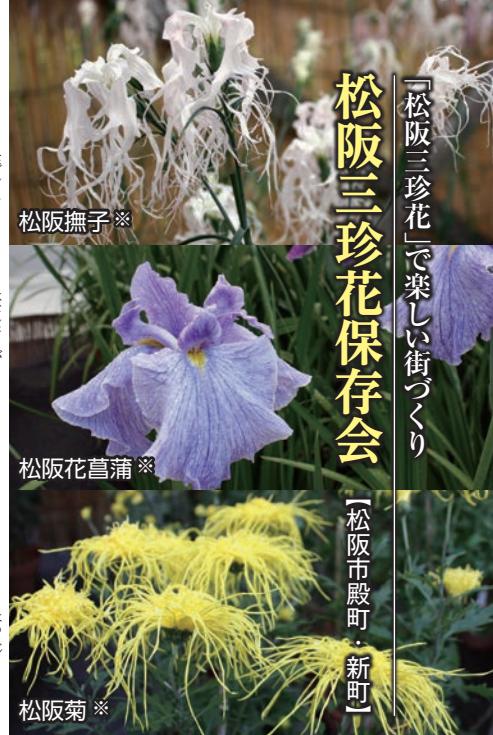
し、中には10年もの歳月をかけて50センチメートル程度に生育したものもあります。県内には四日市市などにも自生地がありますが、こうした自然状態での更新が行われるのは、多度だけなのです。

「4月には観賞活動『イヌナシの花を見る会』を行います。用意したカレーライスなどを皆で食べたりしますよ」と大橋さん。会員以外も参加可能なため、一度体験してみてはいかがでしょう。

### お問い合わせ

NPO法人「多度自然育成の会」  
TEL 090-19949-3038

(大橋 主郎さん)



## 松阪三珍花保存会

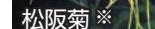
[松阪市殿町・新町]

「松阪三珍花」で楽しい街づくり

松阪撫子※

松阪花菖蒲※

松阪菊※



伊勢撫子・伊勢花菖蒲・伊勢菊一。

三重県天然記念物に指定されている3種類の花には、花弁が長く、縮れて垂れるという共通点があります。撫子と花菖蒲にはさらに共通点があり、江戸時代後期に松坂城下の同心町に住む州藩士の継松栄治が前者を、吉井定五郎が後者を育成改良したといわれます。そして菊は、同時代の新町に住む木下藤八が、嵯峨菊を基に育成改良したと传わります。

こうして、約30名の会員たちが手塙にかけて育てた花は、5月中旬に撫子、6月中旬(本年は6月16日まで)に花菖蒲、11月中旬(本年は11月13日~17日予定)に菊の各展示会

で披露されます。場所は本町の「豪商ボケツパーク」で、県外からも見学者が訪れ、好評を得ています。

また、松阪散策の折には「歩いて楽しい道づくり実行委員会」(山川良樹会長)が中心となって、各発祥地に建てた花碑をめぐるのもおすすめ。菊は新町に、撫子と花菖蒲は殿町(旧同心町)にあります。特に花菖蒲の発祥地には、築230年の吉井定五郎の屋敷が現存し、風情があります。松阪散策に新たな楽しみが加わりました。

育成者の経緯などは異なるものの、各育成者が丹精込めて育て、その後も改



北村 守彦さん

「松阪三珍花保存会」  
TEL 0598-26-6812

### お問い合わせ



吉井 定五郎の屋敷



イヌナシ自生地保全作業※



大橋 主郎さん



「やまとたちばな」の香り漂う街づくり

## 鳥羽商工会議所

【鳥羽市一帯】

「香りをかいでみてください。どこか  
懐かしくありませんか」。



3~4センチメートル程度の大きさの実を付けた「やまとたちばな」※

「戦国最強の水軍大将」と称された九鬼嘉隆、古代から平安時代にかけて天皇に食料を貢いだとされる「御食国」、平成29(2017)年に国の重要無形民俗文化財に指定された「鳥羽・志摩の海女漁の技術」…。

これらは、鳥羽市が誇る歴史・文化

遺産ですが、「やまとたちばな」もその一つです。タチバナは日本原産のミカン科の植物。答志島の桃取地区には、原木(県指定天然記念物)があることなどから、昭和44(1969)年に「やまとたちばな」として市の木に制定されました。

日差しが春めくころ、鳥羽商工会議所を訪ねると、専務理事の清水清嗣さんが、「やまとたちばな」の果皮を使って作られた「匂い袋」を見せてくれました。袋からは、上品な柑橘系の香りが漂い、気持ちが安らぎます。タチバナが日本人にとって特別なものだったことは、『古事記』や『日本書紀』に登場することからもわかります。『日本書紀』には、すいにんてんの天皇の勅命により、田道間守が常世國から持ち帰った非時香果が、今までいう「橘」のことだと記されているのです。非時香果とは、永遠に香っている果実という意味。その香りは、多くの和歌にも詠まってきたが、現代に生きる私たちにも、すばらしさが十分に伝わります。

鳥羽商工会議所では「匂い袋」のほかにも、数々の商品を開発。総務課課長の小林かおりさんを中心としたプロジェクト「百聞一食鳥羽の味」のメン

バーがアイデアを出し合って、お菓子や、調味料などを世に送り出しています。これらは、市内鳥羽1丁目にある「手づくり工房きらり」(TEL 0599-255-1372)や相差町にある「海女の家五左屋」(TEL 0599-33-6770)で購入可能です。また、毎年12月には市内の旅館の女将たちでつくる「鳥羽あこや会」「相差女将ちどり会」「答志島たまも会」の皆さんのが、同会議所で「お屠蘇づくり」を実施。屠蘇とは、橘皮をはじめとした各種の薬草を調合したものです、これを酒に浸して年の初めに飲

むと、災厄を避け福寿を招ぐとされています。この冬は鳥羽を旅して、女将たちの心尽くしの屠蘇を賞味してはいかがでしょう。

なお、「やまとたちばな」の花が咲くのは5月初旬ごろで、11月から12月には小さな実が生ります。市内各地では、約20年前から植栽が進められていますが、この日、同会議所の敷地内にある木には、まだ実が残っていました。清水さんのご好意で実を取り、皮をむくと、一気に爽やかな香りが広がります。「食べられますよ」と勧められて口に含

んでみると、ミカンほど甘くないものの、レモンのような強い酸味はなく、さっぱりといただけました。また、葉にも香りがあるため、慣れた人は近くに寄るだけで、気付くといいます。

鳥羽市が誇る「やまとたちばな」は、浦村町のパールロードや「鳥羽水族館」などでも見ることができます。鳥羽を訪ねれば、いたるところで上品で懐かしい香りに出合えるかもしれません。

### お問い合わせ

TEL 0599-25-2751  
鳥羽商工会議所



桃取地区での実の収穫作業 ※



向かって左から  
小林 かおりさん、清水 清嗣さん



「やまとたちばな」を使用して制作した商品



「お屠蘇づくり」をする  
女将さんたち※

世界中の人々がつながり、本当の里山を育てる

## NPO法人 赤目の里山を育てる会

【名張市上三谷】

「里山の本来の姿を見てください」

水温むころ、名張市の上三谷地区にたたずむ「エコリゾート赤目の森」を訪ねると、NPO法人「赤目の里山を育てる会」理事長の伊井野雄一さんが出迎えてくれました。ここは、同会が里山保全活動や、障がい者の就労支援などを行う拠点となっています。

伊井野さんが案内してくれたのは、「赤目の森」と呼ばれる場所。古くから地域の人々が大切にしてきた里山でしたが、開発計画などが浮上したため、自然環境や歴史的環境の保存を目的としたナショナル・トラスト運動を行い、同会が平成9(1997)年に取得しました。後に隣接する湿地も取得し、あわせて3ヘクタールもの土地の保全活動が今も継続中なのです。

「最初のころは、3メートルものクマザサが生い茂っていて、毎日草刈りばかりしていました」と懐かしそうに話す伊井野さん。以来、23年の歳月をかけて育て上げた「赤目の森」は、適度に木々東屋に設置したベンチ制作、シイタケの収穫・梱包作業など、同会の活動を支えてくれたのです。

この日も、近くの山ではスペインから訪れたPAUさんが、職員たちと一緒に伐採した木の薪割り作業をしていました。これは「エコリゾート赤目の森」の燃料として利用するのです。

名張市の上三谷には、世界中の多くの若者たちと一緒に育てた、本当の里山の姿がありました。



向かって左から松井 英美さん、菅 光輝さん、伊井野 雄二さん、PAUさん、伊井野 恵さん



「エコリゾート赤目の森」外観



伐採された木から作られた炭



「トンボ池」での自然散策※ ハッチョウトンボ※



「トンボ池」などが整備された「赤目の森」

が伐採されているため、陽の光が足元にまで降り注ぎ、開放感があります。

本来の姿だと教わります。

放課後にドングリ拾いなどをして遊んだことを思い出しながら里道を進むと、小さな池が現れました。休耕湿地を利用して整備されたビオトープ「トンボ池」です。この環境を求めて多くの野鳥や昆虫が集まっていますが、中には、日本最小のトンボとして知られるハツチョウトンボの姿も見かけると伺いました。

また、所々で外国语やイラストなどが目に留まりました。これらは「国際ワークキャンプ」で来訪した世界各国の若者たちが描いたといいます。「国際

伐採された木の切り株から新たな芽が出ていました。こうして萌芽更新した木が適度な太さに成長したら、再び伐採して利用するというのが、これまで利用して再生するサイクルが必要です」と、伊井野さんが指示示す先に、伐採された木の切り株から新たな芽が出ていました。こうして萌芽が

これまで守るだけではだめで、利用して再生するサイクルが必要です」と、伊井野さんが指示示す先に、伐採された木の切り株から新たな芽が出ていました。こうして萌芽が

### お問い合わせ

NPO法人「赤目の里山を育てる会」  
TEL 0595-64-0051